

論文の内容の要旨

専攻名 システム創成工学専攻

氏名 松浦達也

本論文は、大学キャンパスにおける建物のCOMMONスペースの配列を検討することで、現代日本の大学キャンパスの公開性を明らかにするものである。

大学キャンパスは、一つの敷地に複数の建物が配置された一団地の空間であり、そこでは、主に学生や教職員が教育研究に利用する校舎や、博物館などの一般の利用者を含めて公開される建物がみられる。こうした建物は、学部や学科を越えて利用されたり、一般利用されるCOMMONスペースをもち、これらが講義室や研究室などの様々な室と繋がり、学内や学外の多様な人々に利用されることで、建物の公開性を形成している。さらに、長い年月を経てきたキャンパスの建物は、単体の建物から、複数の建物が連結された建物の群をなすものまで多岐にわたり、これらが建物毎に公開されることで、大学キャンパスの公開性が徐々に形成されてきた。近年では、教育研究の活性化や、大学に求められる社会貢献の一環として、多様な交流を促したり、地域に開放されるCOMMONスペースの整備が進められており、こうした建物のCOMMONスペースの充実が、現代日本の大学キャンパスの重要な課題のひとつであるといえる。

そこで本論文では、現代日本の大学キャンパスを対象に、一般利用される建物の配置、COMMONスペースの配列からみた連結された建物群、および多目的に利用されるCOMMONスペースを中心とする室配列という3つの視点から各々の空間構成を検討することで、典型的な構成類型を抽出し、それらを比較検討することで、建物のCOMMONスペースの配列からみた大学キャンパスの公開性の性格を明らかにすること、および、得られた構成類型をもとに、社会情勢や大学教育の情勢を踏まえた形成過程を検討することで、大学キャンパスの公開性の通時的傾向を明らかにすることを目的とする。これは、今後のキャンパス整備において、現状を踏まえた上での新たな建物の整備や、既存建物の一般利用への活用による大学キャンパスの公開性を構想する際の認識の基盤として有意義なものと考えられる。

本論文は、以下の6章から構成されている。

第1章「序論」では、研究の目的と背景、研究の資料と方法、既往研究との比較、および論文の構成と概要について述べている。

第2章「一般利用建物の配置からみた大学キャンパスの公開性」では、関東の国立大学キャンパスにみられる一般利用される建物を対象に、建物用途による公開度や、キャンパス内での配置を検討し、さらに、駅や公共施設などのキャンパスの周辺環境や、学部構成による属性を重ね合わせることで、共通する公開性をもつ大学キャンパスの構成類型を導いている。その結果、学外利用による門の公開と、学内利用を主とするキャンパス中央の公開の2つの構成を基本として、それらの複合による門からキャンパス中央の段階的な公開といった、一般利用される建物の公開

度と配置による大学キャンパスの公開性の性格を明らかにしている。

第3章「コモンスペースの配列からみた連結建物群の公開性」では、関東の国立大学キャンパスにみられる建物群を対象に、渡り廊下等の建物を連結する要素や、建物のコモンスペースの配列を検討することで、共通する公開性をもつ連結建物群の構成類型を導いている。その結果、全ての建物のコモンスペースが連結される「建物群の一体的な公開」や、テラスなどの外部要素の連結を含めた「内外一体的な建物群の公開」、一部の建物がコモンスペースをもち、様々な要素により連結される「一部のエントランスの公開」など、連結する要素とコモンスペースの配列から連結建物群の公開性の性格を明らかにしている。

第4章「学内多目的コモンスペースを中心とする室配列からみた建物の公開性」では、全国の国公立大学の建物を対象に、主に学生や教職員を中心に多目的利用されるコモンスペースに着目して、その用途や規模、他の室との配列を検討することで、共通する公開性をもつ建物の構成類型を導いている。その結果、複合化した学内多目的コモンスペースが広場まで連続する段階的な公開と、他の室と接続する単体のコモンスペースが反復する建物内部の公開、その両者を併せ持つものといった、学内向けの多目的に利用されるコモンスペースを中心とする室配列から建物の公開性の性格を明らかにしている。

第5章「大学キャンパスの公開性の形成過程と今後のキャンパス整備に関する考察」では、第2章から第4章までの結果をもとに、建物の建設年代から社会情勢や大学教育の情勢を踏まえた形成過程を検討することで、大学キャンパスの公開性の通時的傾向を明らかにし、さらに類型や形成過程の傾向を踏まえて今後のキャンパス整備を考察している。その結果、大学キャンパスは、昭和40年代に学内利用される建物がキャンパス中央に建設され、その後10年程度で増築し、さらに平成以降には、多目的利用されるコモンスペースをもつ建物が建設され、特に門付近が学外利用される傾向があることを明らかにしている。また、今後のキャンパス整備として、大学周辺との一体的な整備や、テラスなどの外部空間を含めた段階的整備、複数のコモンスペースの一体的整備といった留意すべき課題を考察している。

第6章「結論」は、以上各章で得られた結果をまとめ、本論文で得られた知見を総括している。